

【主題】 コーナー保育

【副題】 ― 自発的な「やってみたい」を育む空間づくりの検討 ―

【クラス名】 くまのみ組

1. 主題設定の理由

4 月当初、1 歳児保育室には明確な仕切りがなく、空間が一体となっている状態であった。また、玩具が子どもの手に取りやすい位置に置かれていなかったため、自分で遊びを選ぶ姿は見られなかった。さらに、保育室が広いことから走り回る姿が多く見られ、1 つの空間に複数の玩具を出していたことで玩具が混ざり合い、落ち着いて遊び込む姿も少ない状況であった。

そこで担任間で話し合い、子どもが主体的に遊べる環境づくりに取り組むことにした。本研究では、保育室の環境を見直し改善することで、1 歳児の遊びや行動にどのような変化が見られるのかを観察し、考察していく。



2. 実践内容と活動経過記録

《6～7月 手作り玩具と仕切りの制作開始》

【手作り積み木】

保育室内の玩具がマンネリ化し、同じ玩具で遊ぶ姿が多く見られていたため、まずは玩具の見直しを行い、手作り玩具を増やすことから取り組んだ。1 歳児が手に持って振ったり握ったりしながら楽しめるものになりたいと考え、音の鳴る牛乳パック積み木を作成した。中には米、ストロー、豆、牛乳パックの切れ端を入れ、振るとそれぞれ異なる音が鳴るよう工夫し、音の違いを楽しめるようにした。

【型はめ（ポットン落とし）】

型はめ遊びができる玩具を、段ボールを用いて制作した。段ボールには、手作り積み木が入る四角の穴と、プールスティックが入る丸の穴を開け、それぞれの形に合わせて入れたり落としたりして遊べるよう工夫した。これにより、積み木を積み上げるだけでなく、物を入れる・落とすといったさまざまな遊び方ができるようになった。

また、子どもたちが興味を持って遊びたいくなるよう、段ボールは色鮮やかに装飾し、視覚的にも楽しめる色合いにした。こうした環境構成により、形の違いや手先の操作を楽しむことができるよう配慮した。



【仕切り制作】

コーナー保育を行うための環境構成として、段ボールを用いた仕切りを制作した。仕切りの制作には子どもたちも参加し、絵の具を使って色を塗るなど、保育者と子どもが一緒に作り上げる形で進めた。

また、視覚的に色の違いを理解できるよう工夫を行った。仕切りは赤・黄・青・緑の4色で構成し、それぞれの色のコーナーには、同じ色の食べ物や生き物、身近な物の画像を貼った。これにより、日常生活と関連付けながら色を認識し、視界から自然に学ぶことができるよう配慮した。

このように、子どもたちが主体的に関わりながら環境を作り上げることで、コーナー保育への興味や理解を深めるとともに、色への関心や認識を育むことをねらいとした。



【木製仕切りの設置】

ダンボールの仕切りを使って遊びの空間を区切ることもあったが、子どもが体重をかけると倒れてしまうことがあった。そこで、旧園舎の乳児クラスで使用していた木製の仕切り「木とあそぼ」を、新たに保育室の中央奥に設置した。

設置にあたっては、子どもが自由に行き来できるよう間を開け、丸窓のパーツを取り入れることで、反対側の遊びや他の子どもが遊んでいる様子を見られるように工夫した。また、3人ほど入ることができるスペースを設け、中に入って気持ちを落ち着かせたり、ゆっくりと本を読むことを楽しんだりできるような空間づくりを行った。

《9月～

子どもの興味のある遊びを広げるために…》

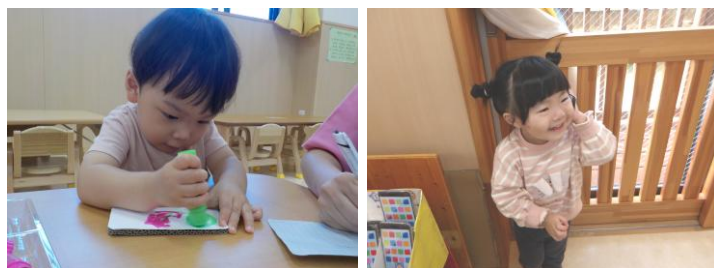
【マイスマートフォン制作】

0歳児保育室にある音の鳴るスマートフォン型の玩具は子どもたちに人気が高く、普段から取り合いになる姿が見られていた。そこで、全員が楽しんで遊べるよう、一人ひとりの「マイスマートフォン」を制作することにした。

制作では、まずクレヨンで自由に模様を描き、その上から好きな動物やキャラクターなどのイラストを選んで貼り付けた。スマートフォン本体は段ボールを二重にして強度を持たせ、表面には白い紙を貼り、その上から透明テープを貼ることで丈夫な作りになるよう工夫した。また、アプリのアイコンの1つに子ども自身の顔写真を貼り、自分のものだとして認識しやすいようにした。子どもたちが遊びの途中でも自分で出し入れしやすいように、スマートフォンを収納するスタンドを

用意した。スタンドのそれぞれの場所には、子ども一人ひとりの個人シールを拡大したものを貼り、自分の場所が視覚的に分かるよう工夫した。これにより、自分の物や置き場所を認識し、片付けや取り出しができるよう配慮した。

遊びの中では、大人の真似をして耳に当てながら話すような仕草を見せたり、他児のスマートフォンを見つけると顔写真を確認して持ち主のところへ届けたりする姿が見られた。こうした姿から、身近な大人の行動を模倣する遊びや、他児との関わりが広がっていく様子がうかがえた。



【道路マップ制作】

車の玩具で遊ぶ際、子どもたちは主にマットの上を走らせて遊んでいた。そこで遊びを広げることを目的に、道路の画像を印刷してラミネートし、遊ぶ際に出してみたところ、喜んで車を走らせて遊ぶ姿が見られた。しかし、ラミネートしたものは耐久性に欠け、折れて壊れてしまうことがあった。

そのため、より丈夫にして長く遊べるよう、大きな段ボールを使用して道路マップを制作した。段ボールには道路のほか、長岡市にある建物や店、公共施設、海などの画像を貼り、さらに上から透明テープで補強することで耐久性を高めた。

遊びの中では、道路の上を車で走らせたり、駐車場に見立てて車を止めたりするなど、夢中になって楽しむ姿が見られ、好評であった。また、段ボールの裏側には温泉のイメージを取り入れ、温泉ごっこを楽しめるようにしたことで、遊びの幅を広げることができた。



【センサーボトル】

保育室内には、500mlのペットボトルを用いたセンサーボトルがすでにあっただが、使い込まれてへこみが見られ、またサイズが大きく重いので、子どもにとっては少し扱いにくい様子があった。

そこで、より手に取りやすいようにR1容器を用いて、マラカスとセンサーボトルを制作した。マラカスには大小さまざまなビーズを入れ、振ることで音の違いを楽しめるようにした。また、センサーボトルにはデコレーションボールやスパンコール、海の生き物のシリコンフィギュアを入れ、見た目の変化や浮き沈みの動きを楽しめるようにした。

容器の大きさを変えたことで、子どもが握りやすくなり、片手で持って振る姿が見られるようになった。自由遊びの時間には、マイクに見立てて保育者と一緒に歌ったり、楽器のように音を鳴らして「おもちゃのチャチャチャ」を楽しんだりする姿が見られた。

このように、子どもが扱いやすい素材や大きさに工夫することで、自然と遊びが広がり、楽しむ姿につながっていったと感じられた。



【牛乳パック椅子・机・冷蔵庫の制作】

新たに木製のキッチンセットを購入し、保育室の一角に配置したことで、コンロやシンクを使って食器を洗ったり、料理をしたりする姿が増えた。さらに遊びをより盛り上げる工夫として、ごっこ遊びが楽しめるように、椅子と机、冷蔵庫を制作した。

椅子は、子どもたちがテレビで親しんでいる「みいつけた！」のキャラクターをモチーフにしたことで、喜んで座る姿が見られた。机や冷蔵庫は、絵の具遊びで模造紙に描いたデザインを使用し、自分たちで作ったものを使う楽しさを感じられるよう工夫した。また、冷蔵庫の中身には、冷凍食品のパッケージをプリントしたものや地元の名産品を取り入れ、ヨーグルトや牛乳、アイスなど普段目にする身近なものも使用し、身近な生活の場面を感じられるようにした。

その結果、子どもたちは本物に近いものに触れること

を楽しみ、出し入れを繰り返しながら遊びを広げる姿が見られた。



【コーナー保育実践① 10月24日】

公開保育日に、静と動の活動のバランスを意識したコーナー保育を実践した。子どもたちの興味やその時の気分に応じて主体的に遊びを選択できるよう、「スライム遊び」「ままごと遊び」「運動遊び」の3つのコーナーを設定した。それぞれのコーナーは、静かに落ち着いて取り組める活動と、身体を十分に動かしながら楽しめる活動を組み合わせることで、遊びにメリハリが生まれるよう工夫した。

スライム遊びでは、感触を楽しみながら集中して遊ぶ姿が見られ、ままごと遊びでは、友達とのかやりとりを通してイメージを広げながら役割を分担して遊ぶ様子が見られた。一方、運動遊びでは、体を大きく動かしながら開放的に遊んでいた。また、各コーナーの様子は柵越しに見渡せるように配置したため、子どもたちは他の遊びの様子にも自然と関心を向けることができた。その中で、「〇〇やりたい」と近くの保育者に自分の思いを言葉で伝える姿や、次にどの遊びをしようかと期待を膨らませている様子が見られた。自分で選択する経験が子どもの主体性や意欲を育むことにつながっていると感じられた。さらに、3つのコーナーに子どもたちが分散することで、1つのコーナーに集中する人数が自然と減り、落ち着いた環境が保たれていた。保育者も一人ひとりの姿を把握しやすくなり、必要に応じて個別に関わることもできた。玩具や素材を十分に使うことができるため、遊びが途切れることなく持続し、満足感や達成感を得ていた。



【コーナー保育実践② 1月29日】

リモート参観日において、日頃から行っているコーナー保育の様子を保護者に見ていただく機会を設けた。子どもたちがどのように遊びを選び、どのように関わりながら過ごしているのかが伝わるよう、普段に近い環境の中で活動を行うことを大切にしたい。今回は、季節ならではの遊びとして雪遊びのコーナーを取り入れるとともに、おままごと、パズルの3つのコーナーを設定した。

雪遊びのコーナーでは、雪の感触を楽しむだけでなく、遊びに広がりが見られるよう、色水を用意し、かき氷のシロップに見立てた遊びを取り入れた。水を扱う活動であることから、水盤の近くにコーナーを設置し、安心して遊び込めるよう環境面にも配慮した。活動は一度に4人程度の少人数で順番に行う形とし、一人ひとりがゆったりと関わることをできるようにすることで、雪の冷たさや色の変化をじっくりと味わいながら、落ち着いて遊ぶ姿が見られた。

このように複数のコーナーを設けることで、雪遊びを楽しみにしながらも、待ち時間に他の遊びに親しむことができ、全体を通して落ち着いた雰囲気の中で活動が進められていた。子どもたちはそれぞれの場所で思い思いに遊びを楽しみながら、素材に触れたり、友達と関わったりする姿を見せており、日頃のコーナー保育の中で育まれている姿を保護者に伝える機会となった。



【まとめ】

保育室の環境を見直し、子どもが主体的に関われるよう工夫していくことで、遊びや行動に少しずつ変化が見られるようになった。

4月当初は、広い空間の中で走り回る姿や、玩具が

混ざり合い落ち着いて遊び込むことが難しい様子が見られていたが、仕切りを設けて空間を分けたり、玩具の配置や種類を見直したりすることで、子どもが自分の遊びたい場所や玩具を選びやすくなっていった。

また、手作り玩具を取り入れたことで、素材の違いや音、手触りなどに興味を示しながら、繰り返し関わって遊ぶ姿が見られるようになった。自分で作ったものや身近なものを取り入れた環境は、子どもにとって親しみやすく、遊びへの意欲を高めることにもつながっていた。さらに、マイスマートフォンや道路マップ、ごっこ遊びのための家具などを通して、子ども同士のやり取りや見立て遊びが広がり、遊びの中での関わりも見られるようになった。

コーナー保育の実践では、遊びの種類や空間の分け方を工夫することで、子どもが自分の興味や気持ちに応じて遊びを選び、落ち着いて過ごす姿が見られるようになった。また、少人数で遊ぶことで玩具を十分に使うことができ、満足感を得ながら遊び込む様子も見られた。

このように、子どもにとって分かりやすく関わりやすい環境を整えていくことで、自分で選び、遊びを楽しむ姿へとつながっていった。日々の姿から、環境が子どもの行動や意欲に影響していることを感じる実践となった。

部屋の3コーナーのうちの1コーナーは、ままごと遊びのコーナーとして定着した。棚の中から自由に必要な道具を出し入れしながら遊ぶことができ、やり取りを楽しみながら落ち着いて遊び込む姿が見られるようになった。しかし、もう2つの大小のコーナーについては、常に玩具を手にとれる環境として整えるまでには至らなかった。

そこで、小さいコーナーについては、仕切りの一部の空間を棚として活用し、指先を使った玩具を新たに制作・配置することで、子どもが自分で選び、自由に手に取って遊べる環境を整えていくことが必要であると考えられる。また、大きいコーナーについては食事の場面で使用しているため、常時玩具を置くことは難しいが、子どもが遊びたいと感じた際にすぐに用意できるように、準備に時間のかからない玩具を保育室内に整理しておくことが大切であると感じた。子ども一人ひとりの姿に丁寧に目を向けながら、今後も環境のあり方を見直し、安心して自分らしく遊びを深めていける保育を大切にしていきたい。

<手作り玩具紹介>

・牛乳パック積み木



・ポットン落とし



・道路マップ



・温泉ごっこ



・マイスマートフォン



・冷蔵庫の中身



・テーブル

